
背中

結城綾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

背中

【Nコード】

N8715B

【作者名】

結城綾

【あらすじ】

組織壊滅後で元に戻らなかったコ哀の過去振り返り話です。

背中

ふしぎよね・・・

私達・・・子供に戻ってるはずなのに・・・
私にはあなたの背中が大きく見えた・・・
私を守るといったその小さな体は、その時、とっても頼もしくて大きく見えた・・・

ねえ・・・

私はあなたの目に・・・どう映っているのかしら・・・

ふしぎだな・・・

確かに俺たちはガキの頃まで身長が戻ってて・・・
背中なんか広くも大きくもないし、小さいってわかってるけど・・・
何でだろ・・・あいつを・・・守るっていった時・・・

あいつが初めて俺の前で泣いた時・・・

あいつが涙を流して背中を震わす時、

あいつの背中がいとおしく思った・・・守りたいって思ったんだ・・・

なあ・・・

俺・・・ちゃんとお前を守れてるか？

組織が壊滅して数日がたっても、俺は・・・

江戸川 コナン、あいつは灰原 哀のままだった。

理由としては、俺たちはもう、解毒剤を使ったとしても元に戻る確率より、

死ぬ確率が高いとわかったからだ、

あいつは俺に泣いて謝った。

「ごめんなさい・・・ごめんなさい・・・」

涙を流して謝るあいつを、俺は見えていたくなかった。

俺自身、蘭の所へは元に戻っても行くつもりはなかった。

俺はいつの間にか、

灰原 哀を・・・好きになっていたから・・・

そんなことがあって数日、親父に頼んで俺は海外メディアで工藤新一が死んだと報道して貰った。

そのニュースはたちまち日本にも伝わり、
蘭・おっちゃん・警部・高木さん・白鳥さん・・・俺の知り合いや
フアンの人たちが俺の葬式に来た。

唯一俺のことを知っている、哀・博士・服部は複雑な思いで見えて
いた。

でも、俺はこれで良かったんだと思う。

はやく・・・蘭には俺を忘れて欲しかった。

忘れて・・・別の奴と幸せになって欲しかった・・・

エゴだと思う・・・

好きだ、好きだと言い続けて、

結局それは家族愛だった。

いまははっきり言える、俺は、あいつに幸せになって欲しい・・・
でも、哀は・・・俺が・・・幸せにしたい・・・

俺の葬式の後、博士のうちで、俺と哀はコーヒーを飲んでいた。

「ふう・・・やっぱ、哀がくれたコーヒーは美味しいな」

「おだてても何も出ないわよ・・・でも、いいの？」

「？なにがだ？」

「これで情報上あなたは死んだことになったのよ？それで本当にいいの？蘭さんのこと」

「ああ・・・これでいいんだ・・・それに、俺もし元の姿に戻っても・・・蘭に好きだって伝えるつもりはなかった」

その言葉に、哀は目を見開いた。

「なんで・・・？やっぱ私のせいで・・・」

「違うっつーの、俺は・・・お前が、灰原 哀・・・が好きだからさ」

「えっ？」

そう言うのと、哀は驚いた顔で俺を見た、まっ・・・そうなるとはおもってたけど・・・

「いつの間にか・・・お前と一緒にいることが・・・安心になって、お前がいけないことが・・・不安に変わってた・・・」

「く・・・江戸川くん・・・」

哀は俺を工藤くんとは呼ばないようにしてくれていた、俺も灰原じゃなく・・・名前で呼ぶようにしてた。

「俺・・・前にいったよな、俺がお前を守るって・・・あれ・・・お前の背中見てて思ったんだ」

「え？」

「小さいのは・・・俺たちガキなんだから当たり前なんだけどさ、でも、それ以上に、俺・・・お前の背中が小さく見えてさ・・・こいつは俺が守らなきゃって思った」

「・・・」

「最初は解毒剤のためだった・・・でも、段々・・・別の感情が俺の中で生まれた・・・」

「？」

「こいつを俺以外の男に守らせたくない・・・ってな」

「江戸川くん・・・」

「いまだからはつきり言う・・・お前の背中、俺は死ぬまで守っていく・・・お前が・・・好きだから」

その瞬間・・・

哀は大粒の涙を流した。

「お、おい・・・」

さすがの俺も涙を止めることはできなくて、哀を背中から抱きしめる。

「それって・・・うれし泣きって思っているんだよな？」

「バカ・・・っ・・・でも、私もあなたのこと・・・ずっと前から・・・好きだった」
「ん・・・ありがとう」

まだまだ小さい君の背中・・・
だけど俺は・・・ずっとお前の背中・・・守ってやる・・・
一緒に大きくなっていく？

な、俺のクールで泣き虫な恋人さん・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8715b/>

背中

2010年10月15日21時55分発行